

兩 生 類

概 説

日本における両生類の種類は、現在のところ亜種を含めてサンショウウオ目3科22種、カエル目5科42種が知られている。本州にはサンショウウオ目3科14種、カエル目4科17種が分布している。本県では、サンショウウオ目3科6種、カエル目4科13種が記録されているが、隣県と比較すると、ホクリクサンショウウオ、ブチサンショウウオ、カスミサンショウウオ、ナガレタゴガエル、ヌマガエル等が本県には生息していない点で異なり、動物地理学上、福井県は東日本と西日本の微妙な境界域にあたる特異な生息域である。

県内の両生類については、1980年より1983年の4カ年の第一次「福井県みどりのデータバンク」調査、1993年から1997年の5カ年の第二次「福井県みどりのデータバンク」補完調査を実施し、県内を2km四方の1179メッシュに区分した台帳に生息地・生息数の確認、生息地の環境変化を含めて調査された結果を記入した目録があることから、福井県の両生類の全体像はほぼ把握できている。その結果、県域絶滅危惧類は2種、県域絶滅危惧類は1種、県域準絶滅危惧類は1種、要注目1種を選定した。

天然記念物のオオサンショウウオは、過去に、嶺北の九頭竜川本流(1960年)、真名川(1935年)、未更毛川(1900年)一乗川(1973年、1980年)、天王川(確認年不詳)、嶺南の五位川(1900年)、道木谷川(1970年)、榎谷川(1935年)、北川(1970年)、関根川(1982年)、坂本川(1954年)で成体が捕獲されているが、これらは他県から移入されたものと考えられる。最近では、嶺南の佐分利川上流域の川上(1983年)や、耳川(1985年)、でも確認されている。川上や染谷川(1970年)では、地元の漁師が60年程前までオオサンショウウオの卵塊を確認していることから、過去には繁殖していたものと考えられる。しかし、各河川とも、「福井県レッドデータブック」作成補完調査では生息が確認できなかった(長谷川、2000年)。近年の各水系上流では、護岸工事や砂防工事、国有林の伐採等でオオサンショウウオの生息環境が著しく荒廃しつつあることは、憂うべき事実である。単年度の調査であることから、現在も生息していることを期待して、県域絶滅危惧類と選定した。

小型サンショウウオ類では、環境省レッドデータブックの絶滅危惧A類のアベサンショウウオが生息している。これは、1993年5月にバランサーを持つ止水性サンショウウオと疑われる幼生が長谷川により発見され、1997年に卵嚢や成体が確認され、1998年に京都大学松井正文教授によりアベサンショウウオと同定されたものである。この種は、県外では京都府、兵庫県の日本海側でわずかに分布するものである。福井県での分布域は、環境省の希少野生動植物種保護増殖事業(1998~99年度)、県のレッドデータブック作成補完調査(2001年度)等で確認されたものであるが、坂井郡北部及び、丹南地域で生息が確認され、日本での最大生息地であることが判明した。しかし、小型サンショウウオの中でも生息域が極端に狭い部類に属する本種は、特に産卵場が民家に隣接する丘陵地や山麓部の休耕田の湿地や溝であり、人間の生活圏と重複しているため、常に都市化や開発によって消滅する危険がある。

クロサンショウウオは、福井県以北では標高数mの低地から標高2,000m以上の山岳地帯まで広く生息しているのに対して、本県では嶺北地域の標高400mから標高1,000mの山岳地帯に局所的に生息するもので、福井県は生息南限にあたる。中山間地の林道開設や水源地域の森林の造成等が進行し産卵環境が減少しているため、要注目種と選定した。

その他、ヒダサンショウウオは嶺北・嶺南の低地の山麓帯から山地に広く分布し、生息数も多い。ハコネサンショウウオは、確認生息地、個体数は少ないが、ややヒダサンショウウオより高所に分布している。イモリは低地の水田や池・沼等に普通に見られる。

ヒキガエル類では、アズマヒキガエルが広く生息している。ナガレヒキガエルは嶺北地域の河川の上流域の渓流にのみ生息しているが、砂防ダム等で産卵地が激減していることから、県域絶滅類とした。

ダルマガエルは、トノサマガエルと混生し、嶺南地域7地点で生息が確認されている。日本海側として、唯一、福井県若狭地方にのみ分布していることは注目される。背中線を持たず、背面の黒色斑は孤立し、腹面の暗色斑が顕著であることから、典型的な岡山ダルマ種族に近い個体が多い。また、近年、滋賀県に分布する背中線を持つ名古屋ダルマ種属も確認された。しかし、ダルマガエルは、確認された7地域のうち5地域が圃場整備や大型道路建設により生息環境が改変され、近い将来絶滅すると予想されるので、県域絶滅危惧類に選定している。

その他のカエル類では、アマガエルは、低地では県下全域に普通に見られる。ニホンアカガエル、トノサマガエル、ツチガエルは平地や丘陵地、山麓帯等に多いが、生息数は減少している。ヤマアカガエルは、平地から山地帯まで分布域は広く生息個体数も多い。タゴガエルは、普通、山麓帯や低山地に生息し、かろうじて標高1,000mの部子山で見られる程度であり、高所では少ない。モリアオガエルも県下一円に広く生息しており、海岸近くの山際水田から標高1,200m以上の高地でも見られ、生息数は多い。シュレーゲルアオガエル、カジカガエルも県内全域に分布し、シュレーゲルアオガエルは平地や丘陵地に、カジカガエルは河川の上・中流域に多い。北アメリカからの移入種であるウシガエルは北潟湖周辺から三国の大堤、芦原や金津の丘陵地帯の沼、三方湖、日野川下流域にも生息するようになり、分布域を拡大している。

福井県は、他県と比して両生類の多様性が保全され、個体数も非常に多いといえる。しかし、近年さまざまな開発の影響を受けて、これまで普通に見られた種まで減少傾向にある。これは水域環境と成体の生息する周辺の陸域環境の両面から影響を受けているためと考えられる。

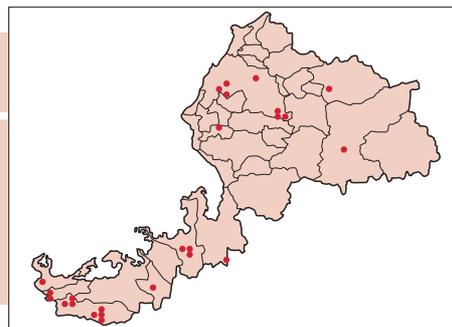
(長谷川 巖)

オオサンショウウオ

サンショウウオ目オオサンショウウオ科
Megalobatrachus japonicus (Temminck)

福井県カテゴリーー 県域絶滅危惧 類

環境省カテゴリーー 準絶滅危惧



種の特徴

世界最大の両生類の一つで、全長は普通750～950mm程度。全身が扁平で、特に頭部と口は大きく、四肢は短い。背面は赤褐色地に不規則な黒褐色の斑紋がある。体側には皮膚の皺があり、個体変異が大きい。夜行性であり、山地の上流から中流域に生息し、繁殖期は上流域で行なわれることが多い。繁殖期は8月下旬から9月中旬で、雄は岸辺の深い横穴を占有し、雌が巣穴に入り込んで、卵は直径5mm位で数珠状に400～500個を産卵。50～60日で孵化し、約3～5年で変態する。

生息状況

日本固有種。岐阜県以西の本州、四国及び九州の一部に分布。県内では過去に九頭竜川水系の一乗谷川、鹿谷川、真名川、七瀬川、天王川、未更毛川と最近の嶺南の耳川、南川、榎谷川、染谷川上流に生息確認の事実があるが、人為的に移入された可能性も考えられる。

存続を脅かす要因

河川改修等護岸のコンクリート化による巣穴になる場所の減少。繁殖期の溯上を阻害する移動経路のない堰が主な要因。また、餌となる多数の甲殻類・小魚が生息する河川環境の多様性の低下が存続を脅かす要因である。

参考文献

福井県．1985．福井県の両生類・爬虫類・陸産及び淡水産貝類目録．139pp．福井県．

福井県．2000．福井県版RDB補完調査報告書．260pp．福井県．

アベサンショウウオ

サンショウウオ目サンショウウオ科
Hynobius abei Sato

福井県カテゴリーー 県域絶滅危惧 類

環境省カテゴリーー 絶滅危惧 A類

種の特徴

本種は全長80～120cmの小型サンショウウオで雌雄で著しい形態性差がある。雄は雌より大型で、頭部が三角形状であり、四肢が肥大し、種の特徴である。繁殖期には尾鰭が竜骨状になり尾高も大きい。体色は黒褐色。体側、四肢、腹部の表面に青白色の斑点が散在する。

本種は積雪厳冬期前の12月上旬頃から、緩やかな水流のある溝・伏流水域に集まり、水底の落葉の間の中で繁殖。孵化は2月中旬。変態は5月中旬から遅くて6月初旬である。卵囊外皮上に横皺に直交する縦方向の条線が明瞭であり、卵列は2～3列、巻数2～2.5回のコイル状となる。

生息状況

兵庫県の但馬地方、京都府下の丹後半島、福井県に分布。環境省委託業務調査等で、1998～99年に嶺北の坂井郡北部、2000年に武生市西部地域が調査され、他府県よりも広範囲に生息することが確認された。しかし、日本産小型サンショウウオの中でも分布域が極端に狭い。

存続を脅かす要因

山麓帯の林内湿地や休耕田の周辺等に生息するため、道路建設、宅地造成などの土地改変や圃場整備による環境改変、ゴミの不法投棄による環境の悪化が存続を脅かす。他県では絶滅した地域がある。種の保存法により捕獲、殺傷等が禁止されているが、ペットマニアの不法採集も脅威になりつつある。さらに、集水域の森林の改変も産卵場所の水環境の悪化や成体の生息環境の悪化につながる。

参考文献

福井県．2000．環境庁委託業務報告書－希少野生動植物保護増殖事業（アベサンショウウオ）調査報告書．116pp．福井県．

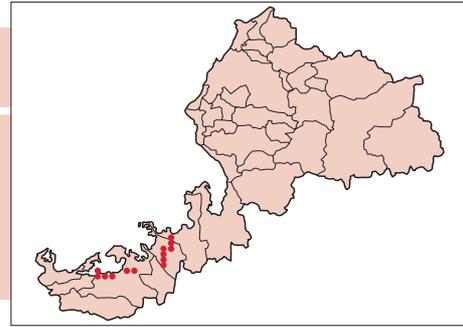
福井県．2000．福井県版RDB補完調査報告書．260pp．福井県．

ダルマガエル

カエル目アカガエル科
Rana porosa brevipoda Ito

福井県カテゴリーー 県域絶滅危惧 類

環境省カテゴリーー 絶滅危惧 類



種の特徴

成体は、背面の背中線がなく、背面黒色斑は孤立し、腹面の暗色斑は顕著であるという形態学的特徴を持ち、雌雄の婚姻色も見られないという点もあわせて、近似種トノサマガエルと区別されている。しかし、最近の調査により、トノサマガエルに似て、背中線をもつ個体も発見されている。

繁殖期は6月頃で水田地帯で産卵する。同所的に分布するトノサマガエルと繁殖期が重なるが、特徴ある雄の鳴き声により、トノサマガエルとの生殖的な隔離を保っている。

生息状況

四国、本州中国・近畿・東海・中部地方に生息が確認されてきているが、環境条件の悪化に伴い、すでに絶滅した生息地も多い。

福井県内での分布地は、嶺南若狭地方の三方町付近の水田地帯に限られていたが、最近、小浜市近郊でも発見された。しかし、依然として個体数は少なく、局所的な分布にすぎない。

存続を脅かす要因

繁殖地が水田地帯であり、埋め立て等の土地変更の影響を直接的に受ける。

参考文献

福井県. 1998. 福井県の両生類・爬虫類・陸産貝類目録. 141pp. 福井県.

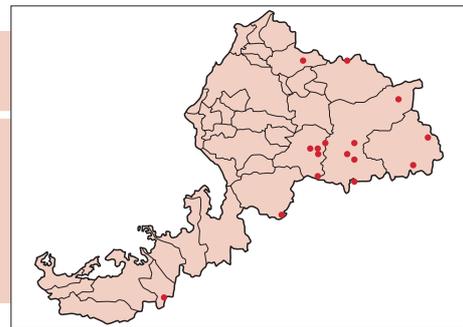
福井県. 1999. 福井県のすぐれた自然 動物編. 452pp. 福井県.

ナガレヒキガエル

カエル目ヒキガエル科
Bufo torrenticola M. Matui

福井県カテゴリーー 県域準絶滅危惧

環境省カテゴリーー



種の特徴

アズマヒキガエルに似るが、体形は細身であり、四肢が長く、特に指先が長く、鼓膜が小さく不明瞭である。青味がかかった黄褐色から灰褐色の体色に赤紫斑を持つ個体が多く、腹面は黄色みを帯びている。

繁殖期は4月上旬。山地溪流の比較的水流の緩やかな淵の部分に多く、水深10cmから1mの滝壺の水底の岩石に巻きつけて卵塊を産む。幼生の口器には岩に張り付くほど強健。変態は6月が多いが、個体差が大きい。

生息状況

本州の中部山岳地帯と紀伊半島山岳地に限定されているが、県内では、県下一円の山地に生息するが、九頭竜川、足羽川、日野川各支流の源流域に生息する。確認個体数は減少している。

存続を脅かす要因

土地造成や林道開発、砂防ダムなどによる生息地の直接的変更が主な要因である。

参考文献

千石正一等. 1996. 両生類・爬虫類・軟骨魚類. 平凡社.

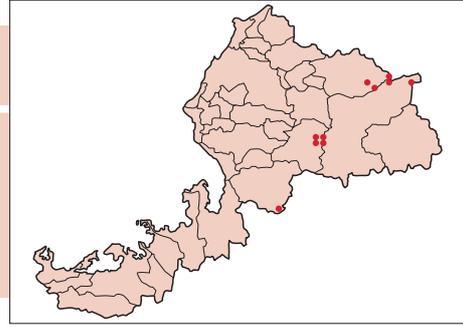
福井県. 1998. 福井県の両生類・爬虫類・陸産貝類目録. 141pp. 福井県.

クロサンショウウオ

サンショウウオ目サンショウウオ科
Hynobius nigrescens Stejneger

福井県カテゴリー 要注目

環境省カテゴリー



種の特徴

主に止水である池や湿原に春先に産卵する。産卵期のみ水に入り、繁殖行動が終われば、山間部の生息地に移動する。

本種の典型的な卵嚢は、透明な外層と白濁した内層とからなる。しかし本県産の卵嚢は内層が透明なタイプもあり、標高が高くなるにつれて透明な卵嚢が多く見られる傾向がある。また、卵嚢外皮に縦線が見られることも興味深い。

生息状況

本州東北地方から中部地方に分布している。福井県は日本におけるクロサンショウウオの分布地として南限であり、生物地理学的に興味深い位置にある。また、緯度が下がるほど、生息地の標高は上昇する傾向がある。福井県内での分布地は、石川・岐阜・滋賀県との県境の山岳地帯で、標高も1,000m前後で高い。しかし、最近の調査で今立郡池田町の標高400m地点で生息地が確認され、県内では標高が低い生息地として初記録となっている。

存続を脅かす要因

繁殖地が主に山岳地帯の池であるので、直接には開発等の影響は受ける可能性は小さい。しかし、池田町の生息地については低標高であり、産卵場所としての水たまりが道路のすぐ脇にあるという点で人為的影響を受けやすい。

参考文献

福井県．1998．福井県の両生類・爬虫類・陸産貝類目録．141pp．福井県．

福井県．1999．福井県のすぐれた自然 動物編．452pp．福井県．